

一章 兄心は愛妹のために

心愛が、泉命女子学園からの合格通知を手にしてから一週間後。六月の第二日曜日。

大渦のような歓声の中、真心はリング上で静かに息を整えた。
ボクシングは一対一。
だれの助けも借りられない。

四角いリングに逃げ場はなく、強さのみが己の存在価値を示してくれる。
アマチュアの高校生は、一ラウンド二分、計三ラウンドで勝敗を決める。

対戦相手である柳澤を中心据え、時計回りに移動しながら、ときにはリズムよく、またときにはわざとリズムを崩しながら、真心は左ジャブを打ち続けた。

右のフェイントを織り交ぜつつ、柳澤を精神的に追いつめていく。
彼も、県大会の決勝まで勝ち上がってきたという実力と自負をもつていてから、少々パンチを打ち込んで音を上げようとしない。ボディもかなり鍛えているようだ。

このまま判定までいっても勝てるけど……。

判定勝ちは、どうにもつまらない。他人の印象で勝敗を決められるより、どちらが強いか白

ジャブシ

黒ハツキリつけたいと、真心は常々考えている。

だから、ゴングまで逃げ回ろうという気はさらさらない。ぐいぐいと柳澤の射程内に体を押し込んでいく。

ヘッドギアをこすり合わせるように体を近づけ、接近戦で押しまくった。

反則をとられないギリギリの高さまで頭を下げ、両足を開く。

「くそっ、てめえ、殺すぞっ！」

柳澤が、耳もとで汚い言葉を吐き捨てるが、真心は目を合わせず、手もとめず、審判に暴言を訴えることもなく、ただただ上下にパンチを散らし、左右に動き続け、相手の精神を削り続けた。

なぜか、どこをどう打てば相手が嫌がるのか、どのタイミングで拳こぶしを打ち込めば当たるのか、真心にはほんやりとわかった。

高校に入つてから始めたボクシングが、自分にピッタリのスポーツだと実感できるのに一ヶ月も必要ななかつた。

小・中学校で、野球、サッカー、バスケ、バレーなど、いろんなスポーツをやつたが、どれもうまくいかなかつた。周囲の選手たちが、真心についてこられなかつたからだ。

だから、つまらなかつた。

思いきり自分を出せない、表現できないもどかしさに、真心はいつも退屈していた。そしてようやく、個人競技であるボクシングと出会つたのだ。ただ腕力が強いだけでは、勝てないことを知つた。速さだけでもダメ。スタミナだけでも勝てない。

だから楽しかつた。

楽しんで、他の部員たちが嫌がる練習をやり、技術を身につけ、いまこうして高一ながら県大会決勝のリングに立つてゐる。相手は、ふたつ年上だ。

ふたつ年上？ だからどうした！

ライト級という真心の階級は、アマチュア規定で五七から六〇キロという体重幅でランクわけされた激戦階級である。

そこを勝ち上がつてきた柳澤は、確かに強い。凶悪そのものといったヤンキー^{づら}一面で、眉毛もいまだき爪楊枝^{つまようじ}のように細いし、根性もあるようだ。

それでも、負ける気がしなかつた。観客席で、心愛が応援してくれてゐるから。真心はステップをとめ、柳澤の正面で腰を据えるなり連打を始めた。

柳澤も、負けじと打ち返してくる。が、彼のパンチは技術がともなつていなかつて、腕力まかせのテレフォンパンチばかりだ。

「もしもし、いまから殴りますよお」なんてやつてたら、「避けて下さい」と言っているようなものである。当たつても、くるとわかつていれば堪えられる。

悪鬼のような形相で、柳澤が打ち返してくる。しかし、大振りの単発ばかり。

真心は上下に細かく的確にまとめ、その中に腰の入った強いパンチを数発まとめていく。いまはもう伝説となつてゐる最強のメキシカン、フリオ・セサール・チャベスのビデオを先輩から借り、何度も何度も観て覚え、しつこいほど繰り返し練習したコンビネーションだ。

「このクソ、が、あつ……」

「ストオオオツプ！」

歓声が爆発した。

真心の左フックからつないだ右ストレートで、柳澤の顔が弾け飛んだのだ。

アマチュアは、クリーンヒットを入ればダウンをとられる。一ラウンド二回のダウンでレフエリー・ストップ・コンテスト R S C をとられ、その時点で敗北が決定する。

つまり真心は、あと一度ダウンをとればいいだけ。

レフエリーが、悔しさに歯噛みしている柳澤にむかって一本ずつ指を立て、カウントを取り始める。

八カウントが終わる間、真心はニュートラル・コーナーに背を預け、大きく息を吐いた。そうしながらも、沸き立つ観客席に目をむける。

心愛は確かにいちばん後ろの端っこに座っていたはず……。

リングから見下ろした観客席、その最後尾の右端で、心愛がパイプ椅子^{いす}にちょこんと腰を下ろしている。

でも、兄の勇姿を観てはいなかつた。

両手で顔を覆い、小さな体をさらに小さく縮め、アルマジロのように丸くなっている。兄だから、妹のそんな態度の理由もよくわかっている。

心愛は、暴力的なことが大嫌いなのだ。幽霊も大嫌い。恐いことはとにかく嫌い。それでも、兄が県大会の決勝に出るから、そしてきょうが泉命女学園へ旅立つ日だから、と勇気を出して観戦にきてくれたのだ。

でもやつぱり、殴り合いはダメだつたらしい。

しかたないよな。

そう思うものの、心が妹から離れない。応援してもらいたいな、なんて兄のワガママだとわかつているけど……。

真心は、どうにかこうにカリングへ意識を引き戻した。さつさと終わらせて、妹をぎゅっと抱きしめよう。

シックス、セブン、トレーフェリーが数え終わろうとするのに合わせ、真心はニュートラル・コーナーから離れた。頭の片隅に、両手で顔を覆った心愛の姿が焼きついている。

小さく頭を振った。試合に集中しなければ。
カウントを終えた審判が柳澤から離れるや否や、心愛の映像を振り切るように足を踏み出した。

「！」

不用意すぎた。

柳澤がいきなり繰り出した大振りの右フックを、もろに食らってしまった。心愛の顔が飛散し、視界がブレ、頭の中に霧がかかった。

ドカン、ドカン、ドッカーン、と会場がゆれにゆれた。歓声が大爆発している。
殴り返せ！ 逃げろ！ 迎え撃て！ ガードを固めろ！ バックステップだ！ 足を動かせ！ 的を絞らせるな！ ぐるぐると高速回転する思考に滑り込んできたのは……、
「お兄ちゃん、がんばってええつ！」

心愛の叫び声だった。

どんなに騒音の大きな場所であっても、兄耳^{みみ}は決して妹声を聞き逃さない。しかも、初めてもらった妹の声援である。

柳澤が、勝負所^{どころ}とばかりに突っ込んでくる。

かかってこいこの野郎っ！

真心は両足を踏みしめ、迎撃体勢をとつた。

ちよこまかとしたステップはナシ。フェイントもナシ。拳と拳。力と力。気合いと気合いで……、勝負！

殴った。殴られた。殴った。殴られた。殴った殴った殴った。殴られた。殴り返した。とにかく腕をとめず、柳澤の目だけをにらみつけ、単純にワンツーだけを繰り返した。ワン・ツー。ワン・ツー。ワンツー。ワンツー。ワンツー。ワンツー。

アゴを引き、両肘りょうひじを引き絞り、肩の力を抜き、腕の回転を上げていく。

柳澤が、反則すれすれの動きで肩を押しつけてきた。が、すぐさま体を入れ替え、彼をロープに押しつけ、再び殴りつけた。

心愛の応援があれば、だれにも負ける気がしない。妹の声援をもらつた兄が、負けるはずがない。妹の前ならば、兄は無敵になれるのだから。

勝つのは、オレだ！

『ただいまの試合の結果、一ラウンド一分一七秒、東富士高校、氷沢選手のKO勝ちでした』アナウンスのあと、レフエリーが真心の右手を高々とあげてくれる。心愛が、観客席の隅で嬉しそうに手を叩いていた。

閉会式が終わったあと、真心はスポーツバッグを肩に担ぎ、試合場をあとにした。